猪鼻城跡で検出された古墳群について

－都川流域の首長を探る－

加藤　大揮

はじめに

房総半島には、数多くの古墳[1]が分布している。今日、発掘調査によって、墳丘が失われたものの周溝と埋葬施設のみ検出された例や、後世において塚として再利用された例などが確認され、全国的にはますます古墳が増加していく傾向にある。

そんな中、筆者は猪鼻城跡の発掘調査を担当し、2009年の11月～2010年3月、2010年4月～5月にかけて発掘調査を行った（加藤ほか2011）。以前の調査によって、前方後円墳や古墳の周溝と考えられる溝状遺構が確認され、また、多数の土壙墓が確認されたことから、同様の成果が得られることを期待して調査に臨んだ。その結果、以前の調査でも検出されていた弥生時代後期～古墳時代前期初頭にかけての集落跡と、古墳時代中期初頭の滑石工房跡、古墳時代終末期～古代の溝状遺構と土壙墓、時期不明の柱列が確認された。中期初頭の滑石工房は房総半島において成田の玉作遺跡群[2]を除くとかなり古く、従来考えられてきたような、古墳時代中期における都川流域の様相と異なる可能性を示唆している[3]。

さて、千葉市という現在の行政単位にとらわれることなく、千葉県北西部[4]を俯瞰してみると、一つの共通点が挙げられる。すなわち、本論で取り上げる後期・終末期古墳の分布が希薄で有り、また、大型古墳を築造する古墳群が皆無である点が挙げられる。何をもって大型古墳とするのかは研究者によって異なるが、まず、後期古墳についてその区分基準を明記しておこう。古墳時代後期に増加する群集墳が概ね全長20m～30m程度ということを考慮し、全長40m～50m程度が中型古墳、全長60m以上が大型古墳と、単純に数値の増加のみで区画してみる。すると、千葉県北西部には大型古墳は僅か数例にすぎず、中型古墳も多くない。

一方、房総半島に於ける古墳時代終末期の墳墓は、一般的には前方後円墳から方墳へと変化し、後期に特徴的な所謂「下総型埴輪」・「山武型埴輪」[5]を用いた埴輪祭祀が消滅する段階をもって始まるとされる（安藤1976、安藤1980、安藤1992など）。須恵器を示標にすると、駄ノ塚古墳共伴の須恵器はTK209型式期でも中頃と考えられており（白石ほか1996）、少なくとも7世紀初頭（610年代）には房総半島において方墳の築造が開始されたとされる（図1）。この発掘成果を境にして、従来新しく見られがちであった龍角寺岩屋古墳の年代も、やや古く見られるようになり、現在では7世紀前葉～中葉という考え方が主流を占めているのが現状である。

これらを踏まえた上で、後期古墳の終焉を前方後円墳の終焉（埴輪祭祀の終焉）とし[6]、古墳時代終末期の開始を、「方墳の採用」としてTK209型式の中頃以降とする[7]。その上で、房総における終末期古墳の規模をみてみると、後期古墳とは異なり、全長20m前後の例が多数を占めるようであり、一辺が100mを超えるような大型のものは見出せない。先述した龍角寺岩屋古墳が最大であり、墳長80m程度を測る。駄ノ塚古墳がそれに後続し、墳長60m程度を測るが、これより規模の小さい方墳はいずれも40m前後となる。そこには、先学の多くが指摘したように前方後円墳を築造することへ

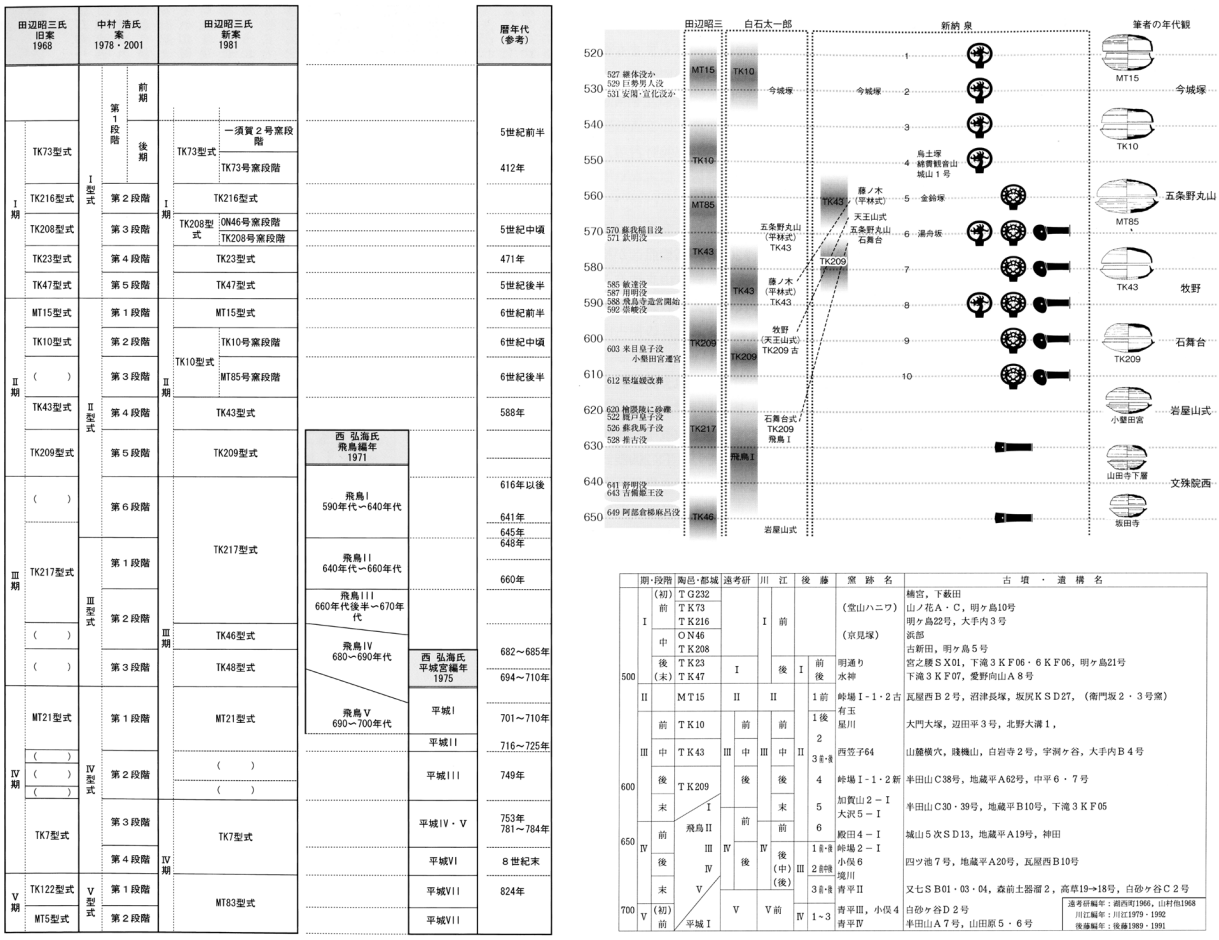


図１　古墳時代後期～終末期・古代における須恵器編年

の規制や、薄葬の徹底など、葬送儀礼の規制が幾度か行われたことが窺えよう。

本論では、先述の古墳時代後期・終末期の定義を踏まえた上で、猪鼻城跡で検出された墳墓・土壙墓群について基礎的分析を行い、また、謎の国造とされる「千葉国造」についても考察を行いたい。

1. 研究史の整理

千葉国造の名が最初に現れるのは、承和７年に完成したとされる『日本後紀』においてである。所謂『国造本紀』にはその名前が見えないことなどから、古代史研究者の間でも律令国造とする研究者と、大化前代の国造とする研究者に分かれており、未だその成立については問題点が多い。

また、東国における国造制度の成立については、白石が東国における方墳の波及などから、国造制度の成立を当該時期に設定しているのに対し（白石 2005 ほか）、甘粕による武蔵国造の乱と屯倉の設置の関係性を考古学的事象から鮮やかに解き明かした論考（甘粕 1966）を支持する見解があり、国造制の成立時期も決着を見ていない（図 2）。

1）千葉国造の研究

千葉国造の研究は、武田宗久が詳細に行っている。『日本後紀』の延暦廿四年（805）十月癸卯条に「正六位上笠臣田作。千葉國造大私部直善人授外従五位下」とあり、翌大同元年（806）癸巳条に「外従五位下千葉国造大私部善人為大掾。参議従三位紀朝臣勝長為兼下総守。」とあることに着目する。

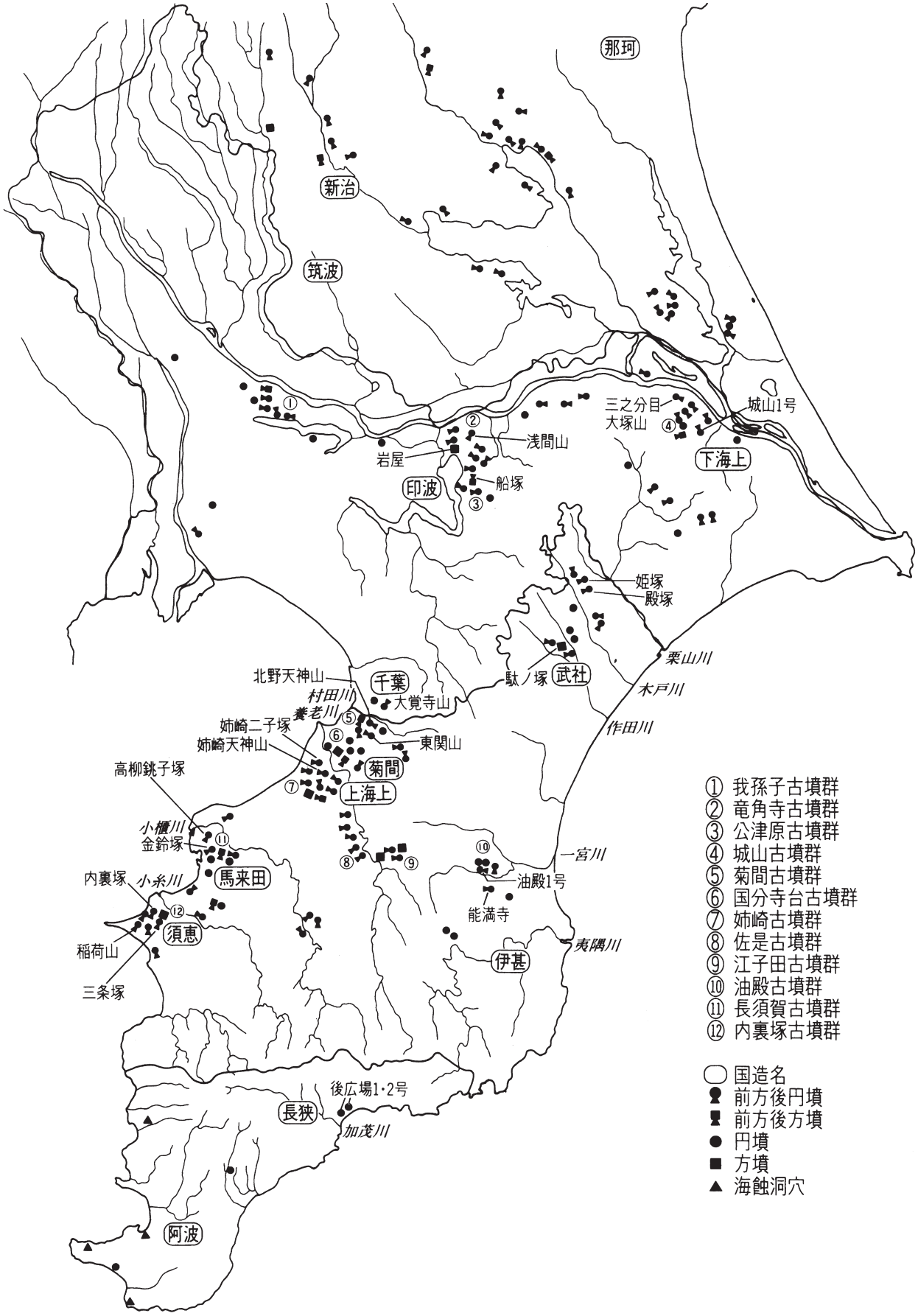


図 2　房総における主要古墳と国造

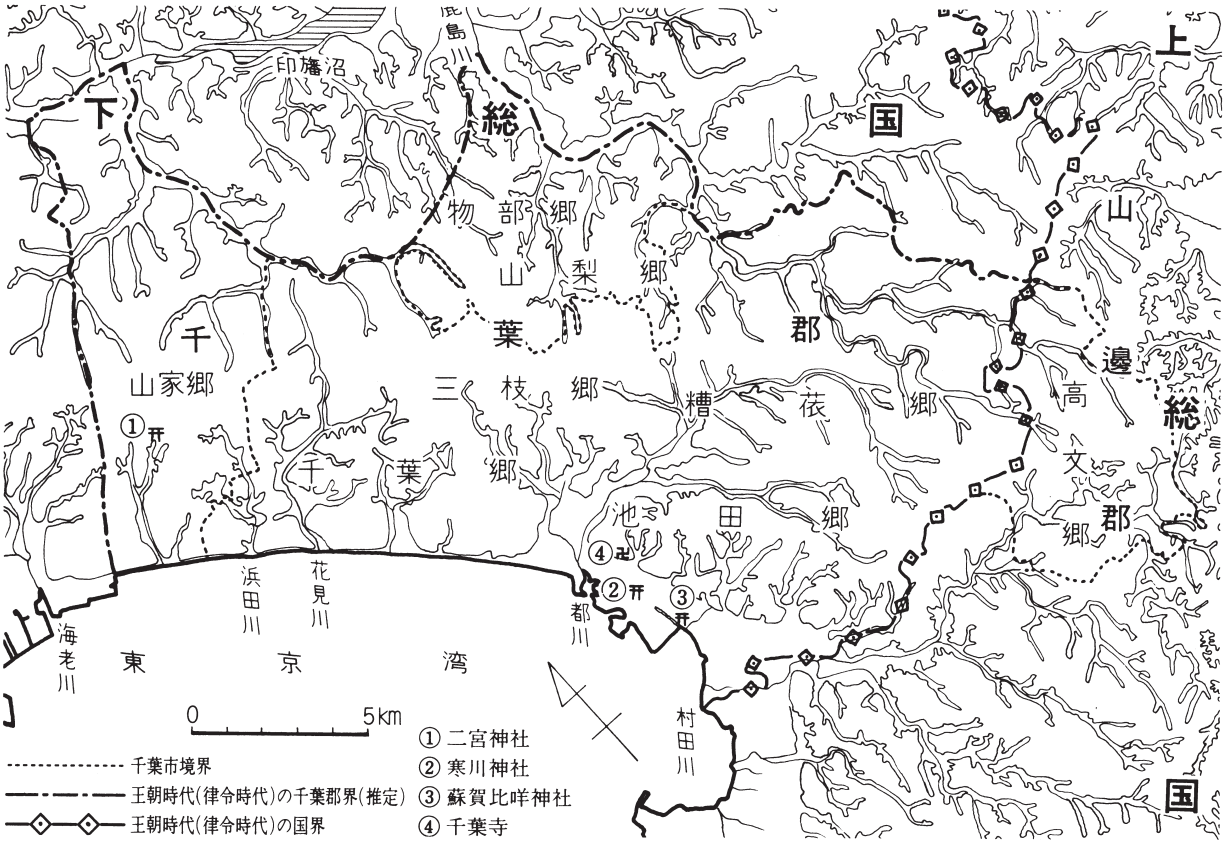


図3　千葉郡内の各郷

武田は千葉国造を『国造本紀』成立段階には存在せず、律令制施行以後に任命された所謂律令国造である可能性を指摘しつつも、「大私部」に着目し、「私部」の成立過程を引き、房総の国造のうち六国造の氏が職業名或いは氏族の名称を冠していることを挙げ、千葉国造は王権の東進による支配下政策の一環として任命されたものであり、拝命したのは千葉郷周辺の在地豪族層であるという（図3）。

また、古墳時代の集落跡や古墳の展開・千葉寺創建時期から、千葉国造の範囲を北は塩田川、花見川沿岸、東は鹿島川沿岸、南は大厳寺町を境界とし、生実町以南は菊間国造の領域に含まれるとする。また、その本拠地は都川下流の沖積平野を含む周辺台地とした。

吉田は、『国造本紀』に記載されておらず、他の史料に取り上げられていない房総の長狭国造・千葉国造などを含む八国造に対して考察を行っている。千葉国造については、千葉地域の古墳が、上総地域の前方後円墳に比べ見劣りすることを指摘しつつも、「千葉国造大私部直」という称呼全てを氏姓と捉え、『国造本紀』原本が大分国造の記載を持っていたと考えられるにもかかわらず、現存する写本には記載事実がないことを引き合いにし、千葉国造にも伝写の際の欠落である可能性を指摘する。

また、私部の分布が、東国においては、大化前代の上総・下総の地域のみに分布することを指摘し、朝夷郡の私部真鳥、葛飾郡の私部石島、葛飾郡大嶋郷の私部小手子売ほか三三名という形をとり、他の諸国には全く分布しないことを挙げ、「大私部」という私部の管理にあたる氏性を持つのは千葉国造のみであるとした。このことから、「新興首長層としての同氏が上総地域の伝統的大も首長と対向していくために、大王家の内廷に直接する地位を得ることの方が有利であったと考える」とし、「在地首長間での自らの地位を有利にするだけでなく、その支配領域の拡大をもはかりうるわけであるから、国造としてよりも大私部直としての側面をより強調する関係を生ずることとなる。―中略―国造であってもその側面をあえて強調せず、大私部直として在地に存在したとすれば、国造本紀に記載されないという事情もおこりうる」と述べ、二つの可能性を提示した。

一方、方墳を蘇我氏の一種の「政治的モニュメント」とする見解は古くから存在しており、今日もなお有力視されているが、千葉市域には「蘇我」の地名が残り、「蘇我比咩神社」という式内社が現存していることから重要視する向きもある。

安藤は、下総地方における終末期方墳を概観し、前方後円墳の消滅を7世紀初頭に設定し、終末期方墳の出現を7世紀前葉におく（安藤1980）。そして、終末期方墳は蘇我氏が積極的に受容した建造物であり、用明・推古天皇陵や蘇我馬子（蘇我稲目とも）の墓とされる石舞台古墳などを挙げて、蘇我氏関係の墳墓に顕著であるとする。さらに、山田寺が蘇我倉山田石川麻呂によって造営が開始されることに着目し、龍角寺の創建瓦が山田寺式系統の軒丸瓦であることを指摘して、蘇我氏がそこに介在していた蓋然性は高いとする。つまり、龍角寺岩屋古墳の被葬者・龍角寺の造営者を在地系豪族層に求めるのではなく、蘇我氏の一族であると推定したのである。

その傍証として、先述の千葉国造との関係性に加え、蘇我比咩神社の存在や、『日本書紀』における蘇我氏と東国の関係性について述べる。蘇我比咩神社付近は古代交通の要衝にあたっているので、広域支配権を確立するうえでの拠点的な位置を占めていたとも想定されるとする。

また、前川は、私部が蘇我氏に出自をもつ豊御食炊屋姫尊（推古天皇）の立后の詔が出された翌年に設定されていることを指摘し、蘇我部の分布ともほぼ一致していることから、私部は蘇我部が母系の立場から、その屯倉の料を掌握するために設定された可能性が高く、現地で私部を管掌し、中央に貢進していたのが、千葉国造大私部氏であったとする。

一方、岡本によって房総の古代寺院研究より、大化前代に東国に蘇我氏の勢力が及んでいた可能性は否定していないが、安藤の理論に基づくと終末期における巨大方墳と山田寺式の瓦をもつ寺院が、蘇我氏の勢力の及んだ地域に出現しなければならないとし、ましてや地方寺院の成立時期は蘇我氏の専権体制が崩壊した以後のことであると批判する（岡本1996）。

また、白石太一郎も、方墳原理と蘇我氏の東国経営については、慎重な立場を崩していない（白石ほか1996など）。

2）猪鼻城跡について

猪鼻城跡は、千葉氏との関連で述べられることが多く、古くから千葉氏の城、千葉城として認識されてきた。発掘調査は、千葉大学・千葉市教育委員会文化課、（財）千葉市文化財調査協会、（財）千葉市教育振興財団によって行われており、1973年に主郭土塁中から蔵骨器が出土したのを端緒として（図4－1）、1980年から幾度か確認調査・本調査が実施され（図4－2～6）、1996年には初めて主郭部分で調査（図4－7）が行われた。この調査では弥生時代中期と古墳～平安時代の集落跡が検出されたほか、14世紀～15世紀にかけての掘立柱建物跡、堀、地下式坑、道路跡などが確認されている（千葉市文化財協会1999）。また、2001年の調査（図4－10）では、14世紀代を中心とする墓壙が多数検出されている（簗瀬2003）。

加えて2003年の調査（図4－13）では、神明社周辺で堀切が検出された。これは独立した曲輪を形成し、物見櫓の可能性が指摘されている（田中英2007）。一方、千葉大学の調査によって、古墳2基をはじめ、弥生時代後期～古墳時代中期初頭にかけての集落跡（加藤ほか2011）（図4－12・16）、中世･近世の遺構として溝状遺構9条、道路状遺構1条、地下室4基を含む土坑15基が確認された（國分2007）（図4－15）。

発掘調査の成果から想定するに、現在の千葉市立郷土博物館周辺には弥生時代中期の集落跡が存在し、それに後続する形で、台地の奥にむかって弥生時代後期～古墳時代前期にかけての集落跡が広がっていくと考えられる。また、遺構外出土遺物や古墳時代中期初頭の滑石工房があることから、周辺に

は古墳時代中期の集落の存在が推定されよう。一方、古墳時代後期に入ると、一転して現在の千葉大学亥鼻キャンパス内は、墓域として使用されたようである。遺構や、遺構外出土遺物にも、古墳時代後期～古代にかけての痕跡は希薄であることからも伺える。

また、中世では、一時期墓域として機能していたようである。主郭土塁中から検出された13世紀代の蔵骨器群に舶載の褐釉四耳壺が共伴している例や、千葉県文化会館建設時に多数の人骨が出土したという例、1996年の調査で土坑から蔵骨器・骨片が確認された例などが挙げられ、2001年の調査時に検出された14世紀代を中心とする土壙墓群などからみても明らかである。先述した舶載の褐釉四耳壺の存在から一帯は千葉氏の墓域であった可能性が指摘されている。なお、墓域は13世紀代に主郭周辺で営まれ、その後周囲へと移ったようである。また、近隣の新田遺跡で13世紀前半の薬研堀と考えられる溝状遺構と13世紀代の土壙墓が確認されている。時代が下り、14世紀代になると、主郭周辺には掘立柱建物が建てられるようである。1996年に確認された礎石を持つ掘立柱建物は、遺物に占めるかわらけの割合が9割を越えること、舶載陶器などがほとんど検出されていないことなどから千葉氏の居館跡の可能性は低く、付随する宗教・儀礼施設が存在したのではないかとされている（簗瀬1998・2000ほか）。

その後、15世紀代に入ると、猪鼻城跡の主郭周辺には堀や土塁などが築かれるようになり、城郭が出現するようである。『本土寺過去帳』や『千学集抄』には永正3（1506）年か、永正13（1516）年に落城したことを窺わせる記述があり、また、1996年の調査時に検出された多数のかわらけなどから、猪鼻城が機能していたのは16世紀初頭までと考えられている。次に猪鼻山周辺が歴史上着目されるのは、幕末になってからである。

幕末、佐倉藩は海上警備のため猪鼻山を保塁として、仮屯所を設置した。また、同時に藩士とその子弟の教育機関として千葉猪鼻学問所が開設された（佐倉藩藩校である「成徳書院」の分校として、

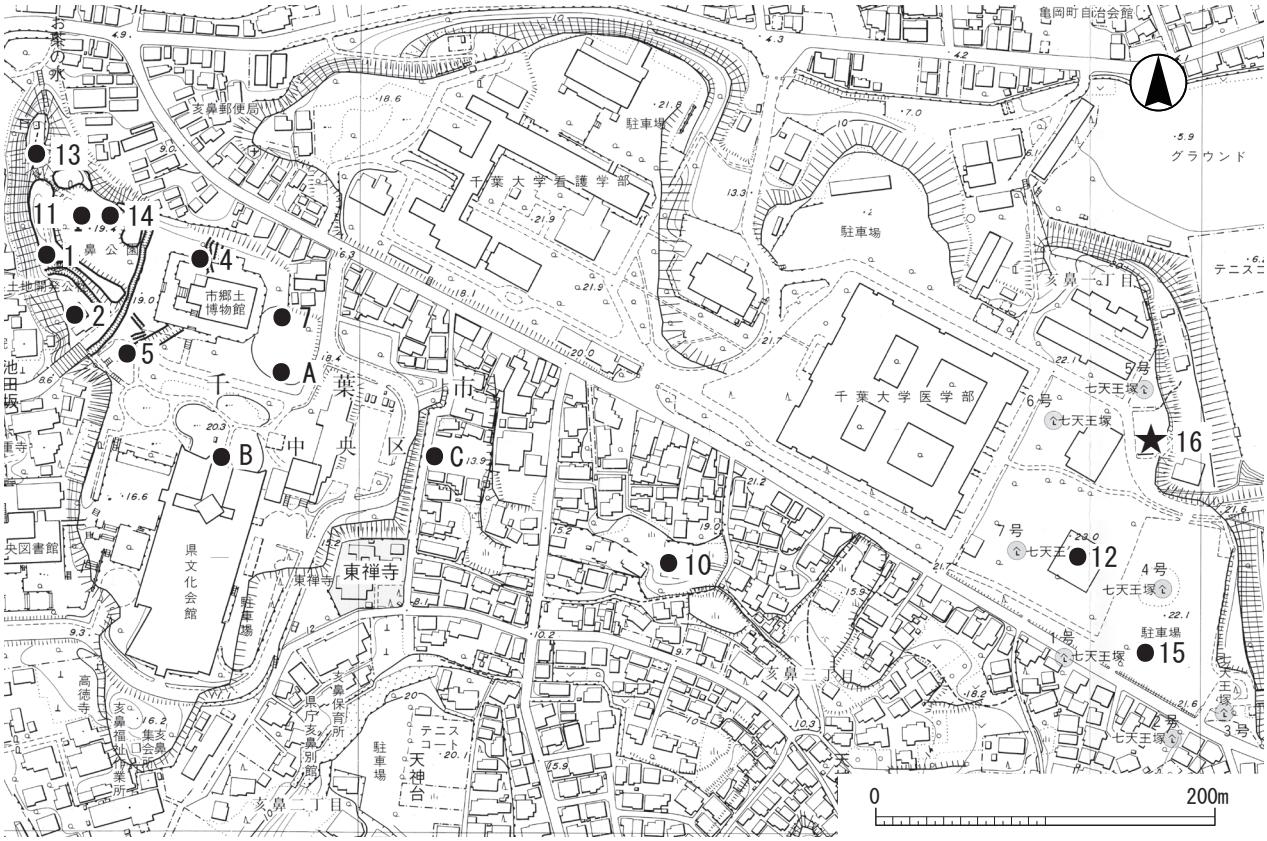


図4　猪鼻城跡及び周辺地点の調査履歴

「成徳南庠」と呼ばれた)。その後幕命で閉鎖され、塩役所となり、炭御用を併せて行ったとされるが、詳細や所在地はよく分かっていない（佐倉市史編纂委員会編 1973)。

千葉大学亥鼻キャンパス内とその周辺には七天王塚と呼ばれる七つの塚が存在している。「将門七騎」、「千葉七騎」、「頼朝七騎」などの七騎塚であるという説や、妙見信仰によるものであるという説、「堀内牛頭天王」説など、諸説ある（千葉日報社 1981 ほか)。「堀内牛頭天王」は「堀内」、つまり城内に存在し、曾場鷹大明神、御達報稲荷などとともに千葉氏によって配されたと考えられている。だが、七天王塚上に存在する石碑は「安永 2（1773 年)」と刻銘されるものが最古であり、それらが堀内牛頭天王に比定されたのは近世初頭の可能性が高いとされる。

翻って、1 号・2 号塚を墳丘に比定し、それ以外を土塁の残存とする見解がなされていた（大谷 1988)。全てを土塁の残存ととらえ、盛土の多い 1 号・2 号は大手側の虎口に相当するとの見解も出されていたが（簗瀬 1998･2000 など)、第 2 次調査で前方後円墳 1 基などが確認されていることから、猪鼻城の範囲は現在の郷土博物館周辺に止まる可能性も指摘されている。

3）荒久古墳について

荒久古墳は、現在青葉の森公園内に保存されている方墳である（図 5)。明治 24 年に発掘調査が実施されており、大刀に変形加工が施されたものが出土したというが、その出土品や内容についてはよくわかっていない。

また、昭和 34 年の発掘調査時には、棗玉・鉄製馬具片・人骨などが出土したというが、現在は散逸してしまっているようである。また、荒久古墳の主体部は、軟質砂岩の切石積石室で、互目に切石を積んでおり、石室の寸法が唐尺の値に近接していることが指摘されている（千葉市史編纂委員会編 1974・1976 ほか)。

この古墳は、房総の初期寺院の一つである千葉寺の創建に関わった勢力層の「奥津城」と考えられている。千葉寺の創建年代については諸説有るが、紋様や同笵関係から、市原市武士廃寺例・光善寺廃寺例よりも新しく、8 世紀第 1 四半期に創建されたと考えられている（岡本 1996 など）ことから、

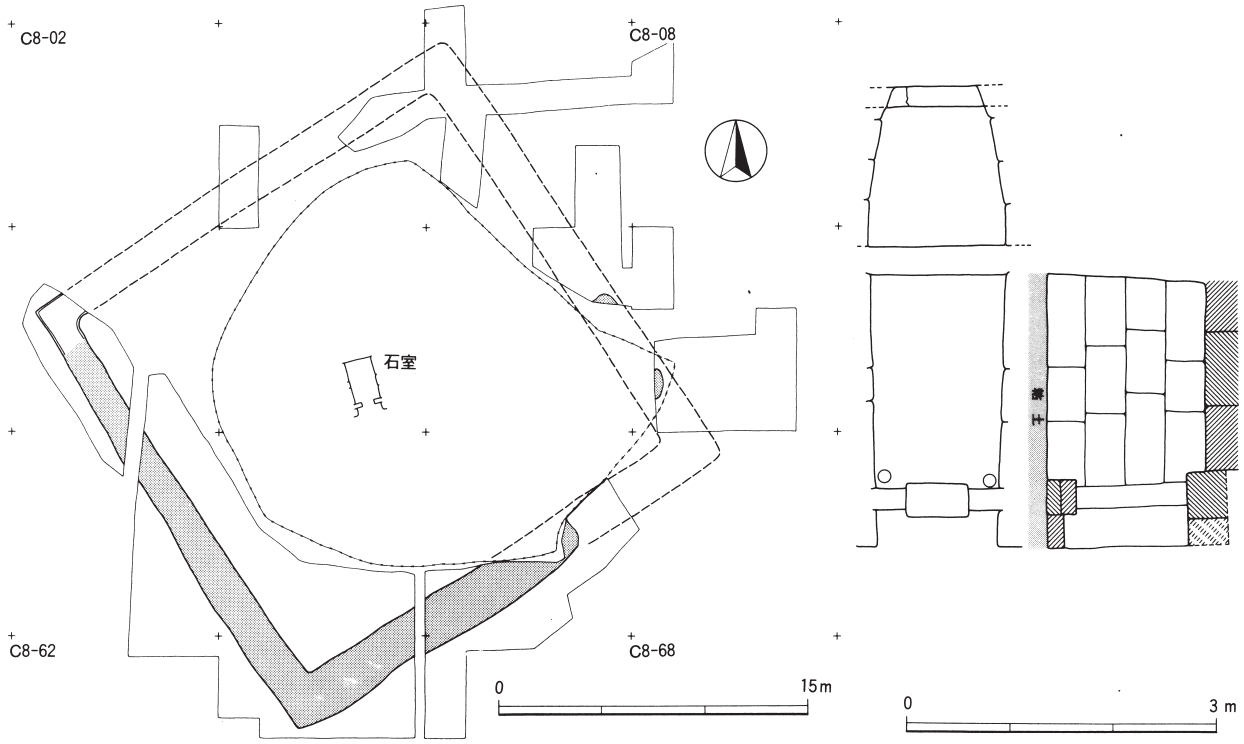


図 5　荒久古墳平面図及び石室平面・立面図

その年代感と大きく齟齬があるわけではないと考えられる。

ただ、荒久古墳を含む荒久遺跡の発掘調査や千葉寺遺跡群の発掘調査の結果、その周囲には終末期～古代にかけての方墳･土壙墓群が展開していたことが明らかとなっている。これら方墳群の年代は、伴う遺物が少なく明確ではないが、その周囲に展開する土壙墓がいずれも 8 世紀後半～ 9 世紀末ごろと考えられていることから、方墳群も当該時期の可能性が指摘されている（渡辺ほか 1991）。

2. 猪鼻城跡の墳墓・土壙墓について

1）都川流域の墳墓群

都川流域の古墳群については、未調査や報告書が未刊行となっているものもあり、その全容を知ることは困難である。ここでは､報告書や概報などで内容が明らかとなっているものを中心に述べる（図 6）。

古墳時代出現期～前期の墳墓については、弥生時代からの系譜を引く方形周溝墓などが検出されているものの、所謂「纒向型前方後円墳」は検出されていない。

中期の古墳群は、前期に引き続き、古墳の数は多くない。前方後円墳は築造されず、その分布も都川支流の葭川を中心とした北部に集中する。葭川流域では東寺山石神遺跡で確認された古墳群が挙げられる。東寺山石神 2 号墳は、長大な割竹形木棺を主体部にもち、立花などの石製模造品と常総型石枕が出土したことで知られている。常総型石枕は 2 個体検出され、それぞれに石製模造品などが副葬されており、その年代は鉄製模造品を伴うことから古層を示すと考えられ、5 世紀前半の年代が与えられている（白井 2002）。また、墳丘下より検出された 7 号住居跡は従来墳丘構築年代の上限を示すと考えられてきたが（千葉県都市公社 1974）、石製模造品・立花の年代、遺物の検出状況など複合的に判断するに、墳丘構築時の祭祀的遺構ではないかという指摘が白井によってなされている。

後期・終末期の古墳は、それまでの前期・中期と比べて格段に増加する。古墳時代前期から連綿と造墓活動が続く古墳群は少なく、主に後期・終末期に入り造墓活動が開始される古墳群が多い。都川支流・葭川流域の戸張作古墳群、仁戸名古墳群、中原古墳群などで、後期の古墳が確認されている。また、今回考察の中心とする猪鼻古墳群も後期・終末期古墳である。

以上のように、都川及びその支流の古墳群を概観してきたが、都川流域の古墳群は、支流である葭川上流域に展開する戸張作古墳群（戸張作遺跡・東寺山石神遺跡など）が知られているのみで、多くは煙滅するか、あるいは未調査となっており、発掘調査に及んだ例は多くない。

また、前方後円墳は、市内の統計を取ると全体に占める割合が 5％程度であり、その分布も市内全域に点在しているのは、各々の小地域を代表する古墳であると考えられている（長原 2009）。また、市街地の中心付近では古くから開発が行われており､多くの古墳が破壊されてしまった可能性もある。

千葉市今井町にあったとされる狐塚古墳は、前方部が後円部よりも低く前期型の前方後円墳であった可能性が指摘されているほか、千葉市登戸周辺には、鷲塚古墳が所在したとされ、古墳時代中期頃の古墳と考えられているが、詳細は不明である。

2）猪鼻城跡で検出された古墳群について

猪鼻城跡では、前方後円墳 2 基、古墳時代終末期以降と考えられる方形周溝状遺構 1 基に加え、古墳時代と考えられる溝状遺構が複数確認され、多数の土壙墓が検出されている（國分 2007、加藤ほ

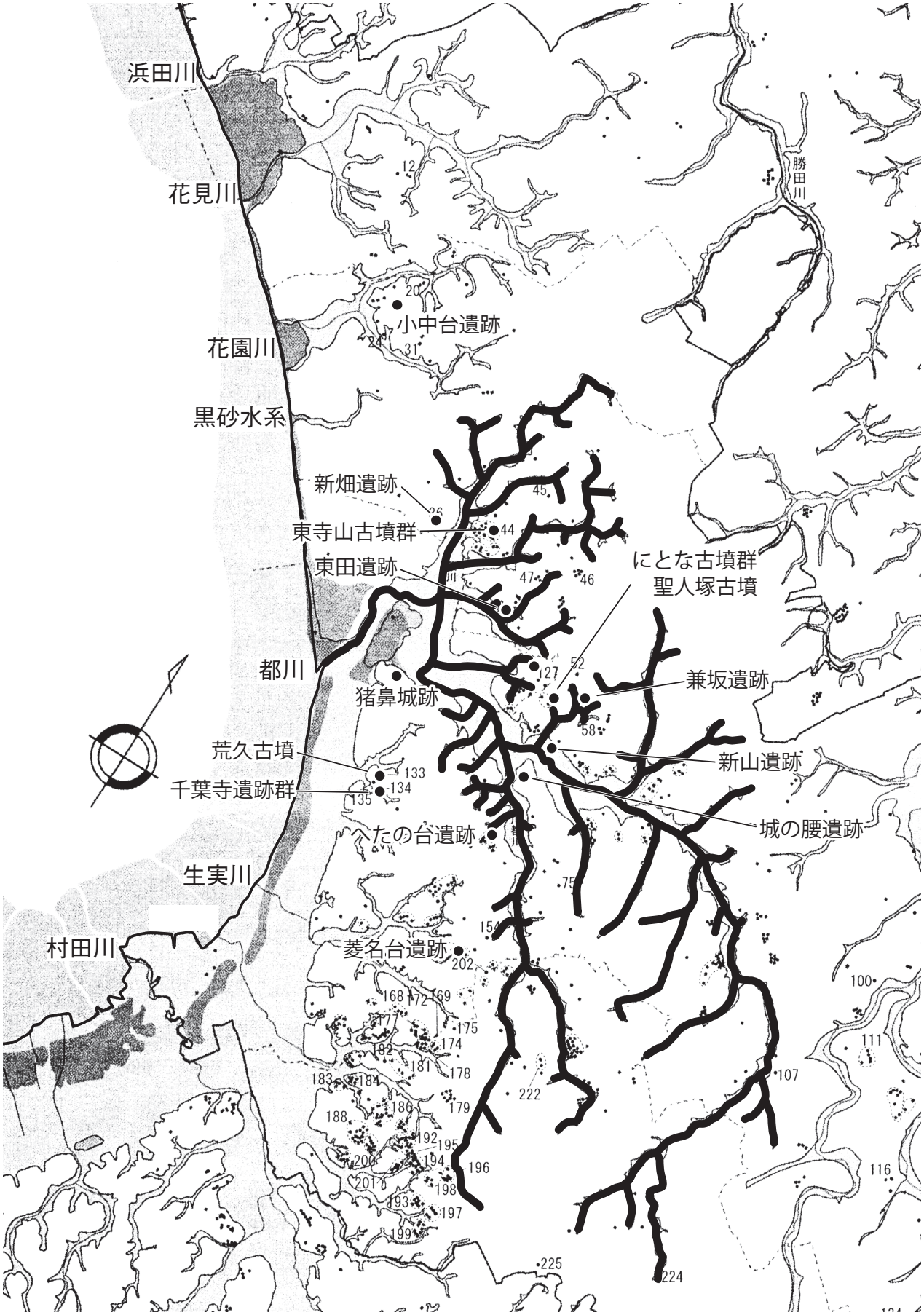


図 6　都川及びその周辺の古墳検出遺跡

か 2011）（図 7）。

猪鼻 1 号墳は墳長 28m 程度を測る前方後円墳であり、後円部中央裾より横穴式石室が検出された（図 8）。また、周溝およびその周辺からは 4 基の土壙墓が検出され、幾度かに分けて追葬がなされた様子が窺える。周溝出土の土器で、時期の示標となる須恵器は、1/3 程度残存していたフラスコ瓶である。東海西部の所産と考えられ、鈴木の編年案に従えば（鈴木 2001）III 期末段階、陶邑編年に照らすと TK217 型式期と考えられる [8]。

また、石室前庭部付近で確認された大甕は、検出状況などから割甕祭祀の可能性があることを指摘し、報告書の記載で石室に伴うような表現したことを訂正する。

また、周溝内部から出土した馬具は、報告書段階では 2 組あるものとしたが、出土状況などを勘案すると 1 組の可能性もある。遺存状態が悪いが、立聞が大型化しており、坂本好夫の編年示標（坂本 1985）や岡安光彦の型式学的編年案（岡安 1984 ～ 1986 ほか）を参照すると、6 世紀末～ 7 世紀前葉の年代が与えられよう。

以上のことから、猪鼻 1 号墳の構築時期は、須恵器から TK217 型式期、7 世紀前葉がその上限と考えられる。墳丘が削平されていることから、そこに初葬の埋葬施設が存在した可能性もあるが、既調査範囲では、覆土や他の遺構に混在するような形でも、古墳時代後期～終末期にかけての土器（土師器・須恵器）がほとんど出土しておらず、掲載遺物以外を例示することが出来ない。これのみを論拠とすることには抵抗があるが、初葬に伴う遺物が須恵器瓶類の可能性は高いと考える。

猪鼻 2 号墳は、調査区内では主体部が確認されず、周溝と考えられる溝状遺構並びに土壙墓が検出されたにとどまる（図 9）。土壙墓より多数の鉄鏃及び大刀が出土しており、鉄鏃は X 線撮影を行っていないため断定は出来ないが、茎部が残存する例は全て棘状の茎関を持ち、古墳時代後期以降の特徴を有する細根系長頸鏃であると考えられる。

身関が確認できる例と退化し身関がない例が共伴しており、型式学的にみて身関がない例が後出すると考えられ、時期は後期末葉～終末期の年代が与えられよう。

また、周溝内部からは須恵器・土師器が出土している。須恵器杯蓋は、天井部に面を持ち、径が 10cm前後となることから、TK209 型式期でも新段階か、TK217 型式期の古段階と考えられる。須恵器の平瓶は、頸部が未発達で肩が張っていない特徴を有し、平瓶の中でも古い特徴を有している [9]。TK209 型式期に属するものと考えて問題なかろう。

土師器は杯身模倣杯である。後期から終末期にかけて見られる形態であり、時期の判断は難しいものの、口径が縮小しており、須恵器の年代を鑑みると、小沢による古墳時代後期の土師器杯編年案（以下、小沢編年と呼称）（小沢 2008）では 5 期～ 6 期に該当すると考えられる。以上のことから、猪鼻 2 号墳の構築年代も TK209 型式期でも新段階か、TK217 新段階に下限が求められる。

報文中でも指摘したが、第 20 号溝状遺構（SD20）を墳墓の周溝、第 48 号土坑を埋葬施設の一つであると捉え、これらを一括して猪鼻 3 号墳という呼称を与えたい。周溝覆土からは他の遺構同様、弥生時代後期～古墳時代前期までの土器が多数出土している。これは、おそらく当該時期の住居跡が造墓活動などによって破壊された際に遊離した土器が、再び周溝などに流れ込んだ結果と考えられる。

周溝はほぼ垂直に堀り込まれており、古墳時代終末期以降の墳墓 [10] にみられる特徴に一致する。残存している 1 辺から、約 7m 程度の方墳であると考えられる。

遺物は、周溝内部からは 1 点のみであるが、須恵器大甕の破片が出土しており、遺構に伴うものと判断した。それ以外の土器は小片であり、時期の特定は困難である。また、埋葬施設とした土壙墓からは異物がほとんど出土しておらず、追葬か単独の土壙墓かは不明である。以上のことから、時期は古墳時代終末期以降とした。

図７　七天王塚と古墳群の位置関係

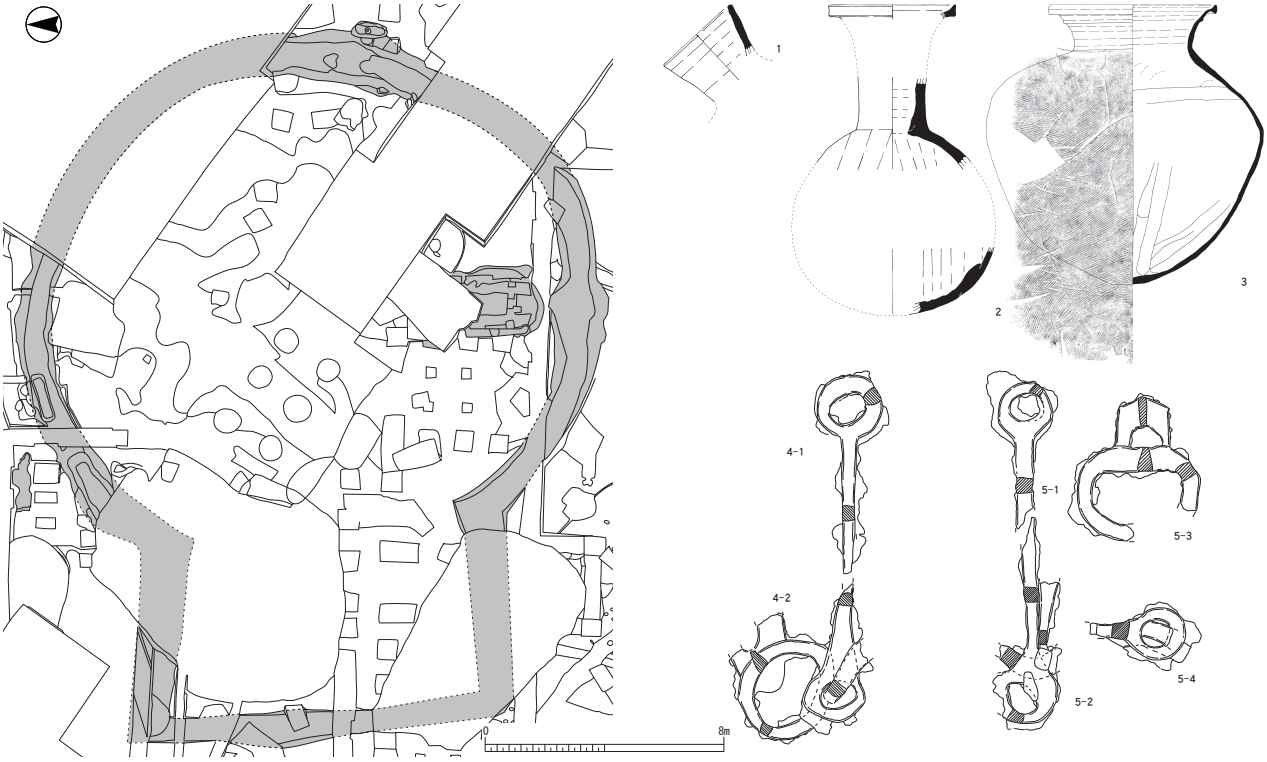


図８　猪鼻１号墳平面図・出土遺物（1・2：S=1/6　3：S=1/12　4～5：S=1/4）

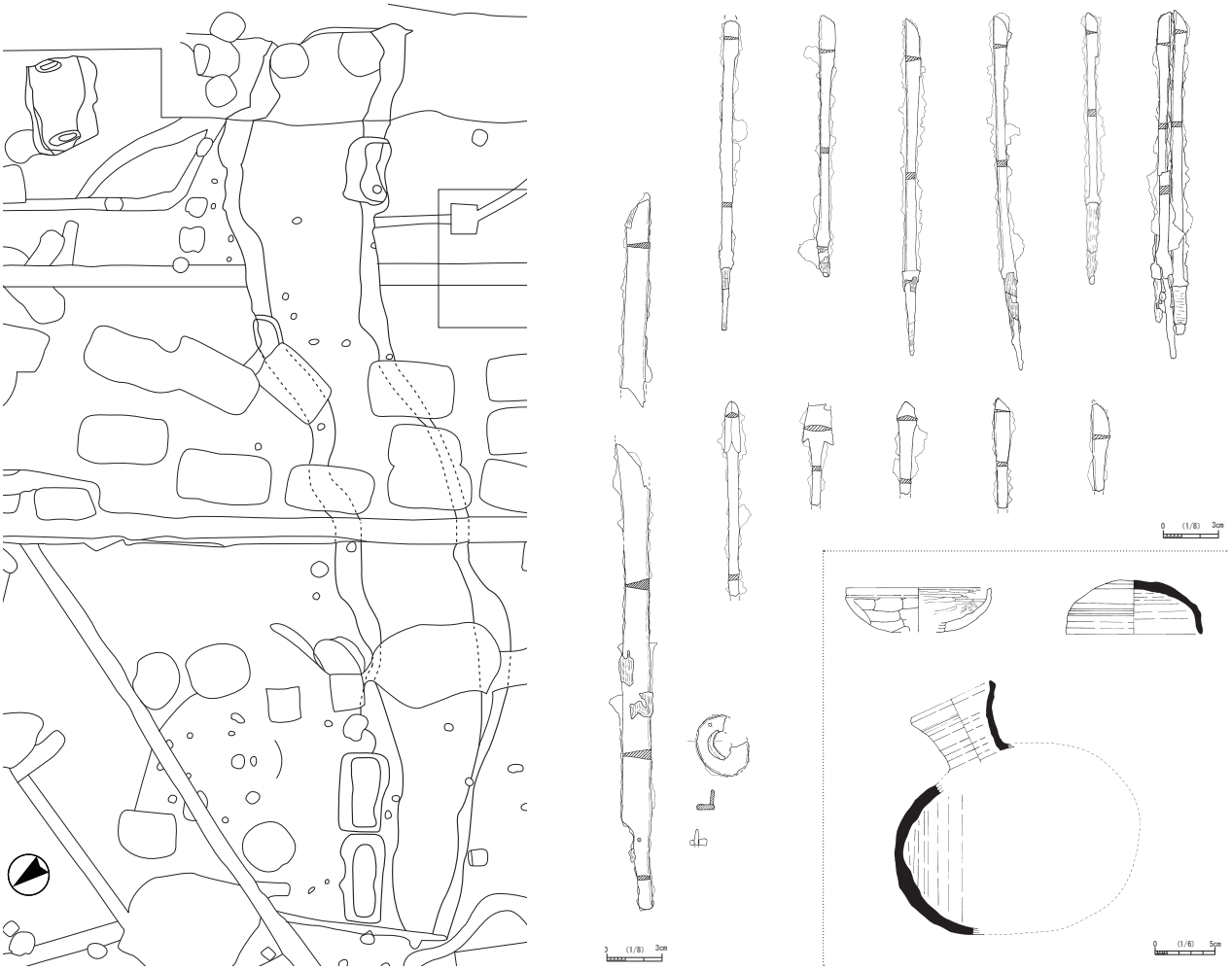


図９　猪鼻２号墳平面図・出土遺物

また、4号溝状遺構と22号溝状遺構は近接しており、同一遺構の可能性があることを報告書でも指摘した。特に22号溝状遺構は円形を思わせる形で屈曲しており、立ち上がりの様子も明瞭である。ただ、調査範囲が限定的で主体部と考えられるような遺構は認められない。ここでは、この2遺構を同一古墳の周溝と考え、猪鼻4号墳という仮称を与えたい。猪鼻4号墳も、他の遺構同様、遺構上面は撹乱で破壊されており、覆土中から弥生時代後期～古墳時代中期までの土器、土師器が出土しているが、伴うと判断できるような遺物はなく、漠然とその時期は古墳時代中期以降と考えたい。

以上の通り、猪鼻城跡で検出された古墳・及びその可能性のある遺構を列記してきた。1～3号墳は古墳時代後期末～終末期にかけての墳墓と考えられ、特に2基の前方後円墳が検出された事実は、都川流域の墳墓を考える上で非常に重要な点である。

3）猪鼻城跡の土壙墓群について

報文中でも触れたが、時期不明の多くの土壙墓が営まれており、古墳時代終末期～古代にかけての可能性があることを指摘した。また、先述した通り、荒久遺跡や千葉寺遺跡群では、終末期～古代にかけての方墳や土壙墓群が検出されており、報告書中で渡辺によって詳しい検討がなされている（渡辺ほか1993）。渡辺によると、荒久遺跡の土壙墓・方墳群と、地蔵山遺跡及び鷲谷津遺跡の土壙墓・方墳群は、遺物がほとんど出土しておらず、わずかな出土例でその時期を求めるに過ぎないが、その構成内容が単独土壙墓・火葬墓を混在させるなど、性格がよく似ており、同時期と断定するには抵抗があるが、おそらく両者は同じ集団に属し、その中の小集団ごとの墓域として機能していたのではないかと考察している。また、荒久古墳は、両遺跡のちょうど中間地点に所在し、また、その築造年代が八世紀初頭前後と推察できることから、荒久古墳とこれらの墳墓・土壙墓群は当然階層差があるにしても、密接な関係性があると指摘している（図10）。

さて、これを念頭に置き、千葉大学構内で検出された土壙墓群をみてみると、これら2遺跡と共通する点、そして、異なった点が浮かび上がってくる。共通する点としては、遺物がほとんど出土せず、また、単独土壙墓が構成要素に含まれるという点である。異なる点としては、火葬墓が明確には確認されず、終末期方墳ではなく、前方後円墳が2基営まれているという点である。

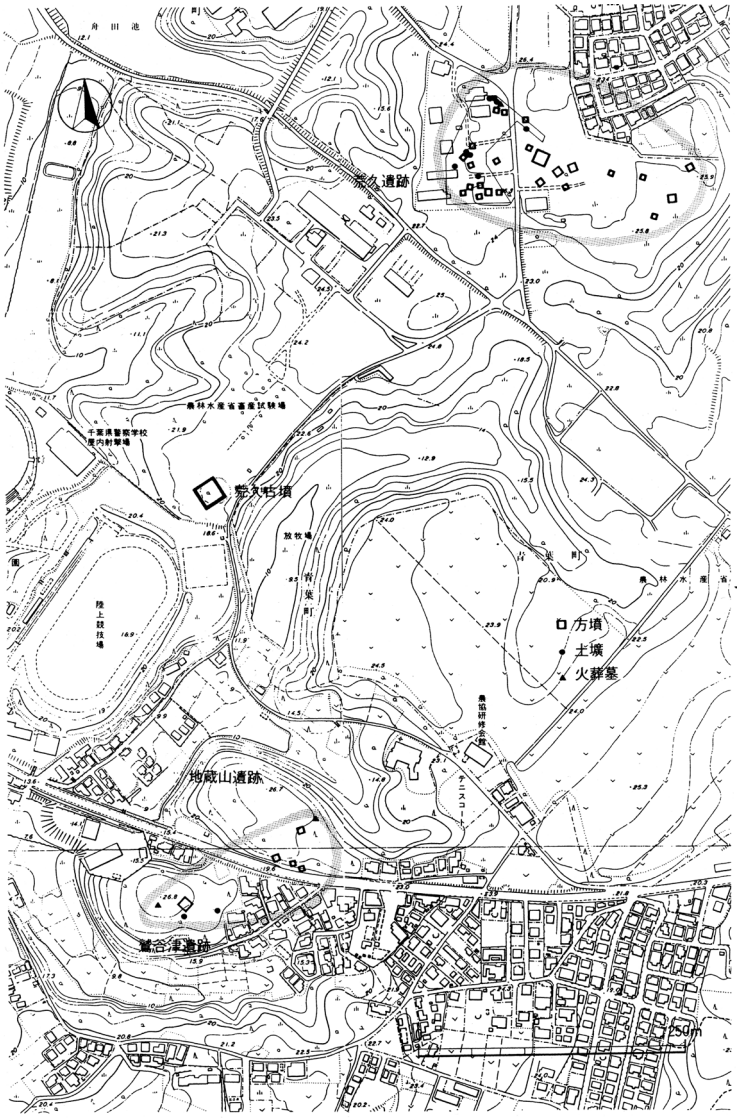


図10　荒久・地蔵山遺跡の方墳及び土壙墓群

荒久遺跡は、集落は古墳時代を通じて営まれているが、墓域として利用が開始

されたのは、8世紀以降と考えられている。一方、猪鼻城跡では、墓域として利用されていたのは、少なくとも古墳時代後期末よりも前である。この点は、前述の2遺跡と大きく異なる点である。また、2号墳周溝脇からは、大刀や鉄鏃を伴う土壙墓が確認されており、被葬者は2号墳に葬られた人物の近縁者が想定できよう（図9）。

同様の事例は、千葉県栗野Ⅰ遺跡にも認められる（図11）。栗野Ⅰ遺跡の土壙墓005では倒卵形の鍔を持つ大刀1点と鉄鏃1本が内部から出土し、土壙墓101では同じく倒卵形の鍔を持つ大刀1点と鉄鏃が28本束になって検出されているなど、2号墳の埋葬施設と類似している。

土壙墓005は台地の両端に展開されている墓域の中間に検出されており、土壙墓101は古墳の周囲に構築されてはいるもののやや距離が離れている（図12）。これらの土壙墓は、検出された古墳の主体部と年代的にも殆ど変

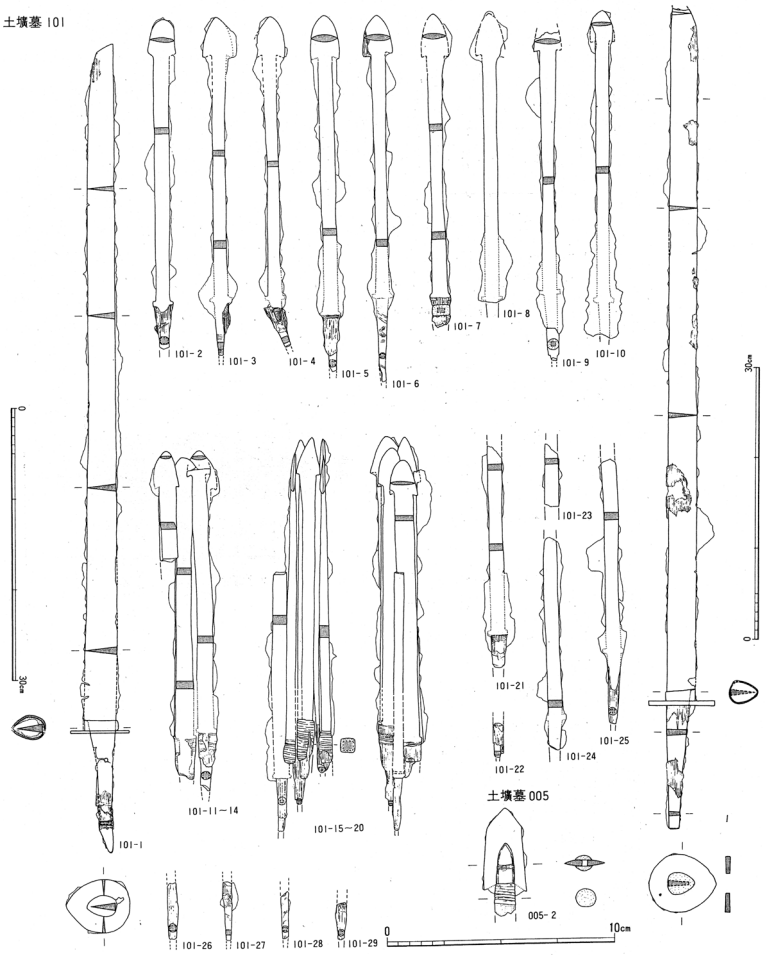


図11　栗野Ⅰ遺跡土壙墓出土の金属器

図12　栗野Ⅰ遺跡の古墳群及び土壙墓群

わらないとされており、主体部の年代は、鉄鏃の特徴から7世紀初頭～中葉に推定されている。また、土壙墓も、この年代を大きく動くことはないとされている（千葉県文化財センター 1991）。また、栗野遺跡では、有天井土壙墓が数多く検出されており、古墳に伴うと想定されるものから、8世紀初頭に位置づけられる例まで存在している。

これらの事例を踏まえた上で、猪鼻城跡の土壙墓・方墳ついて考えてみたい。方墳や土壙墓の年代についてであるが、調査範囲が限定されてはいるものの、明確に火葬墓の検出がなされていない。

火葬の導入については、『続日本紀』の記述や研究成果から、遅くとも8世紀初頭には行われていたことが指摘されており、火葬墓が営まれる時期（少なくとも8世紀以降）には墓域がすでに縮小・廃絶していたか、移動していた可能性が考えられる。

ただ、墓域の廃絶については、古代の土器が遺構外出土遺物としては客体的であり、竪穴住居なども調査区周辺では確認されていないこと、また、前方後円墳の築造停止後に造られたと考えられる方墳が存在することなどから、墓域は古墳時代から継続して奈良・平安時代にも営まれていたと思われるが、決め手に欠けるのが現状である。また、墓域の移動については、先述した千葉寺遺跡群や、荒久遺跡の土壙墓・方墳群がその候補地として想定されるが、あくまで想像の域を出ない。状況証拠として、古代の遺構が殆ど確認されず、古代の土器も客体的で生活の痕跡は乏しいということがあげられるのみで、荒久遺跡や千葉寺遺跡群のように9世紀ごろまで、或いはそれ以降も墓域として機能していたのか、それとも8世紀ごろで終焉へと向かうのか、時期を明示できないのが現状である。

4）猪鼻城跡の墳墓・土壙墓と七天王塚について

ここまで千葉大学構内で検出された遺構群を中心に述べてきたが、猪鼻台地上では弥生時代中期～古墳時代中期にかけて集落が営まれ、その後一旦断絶があり、古墳時代後期に入り墓域として利用が開始される様子が確認できた。

その下限については、前節でも若干考察を行ったが、それも推測の域を出ないものである。古墳の築造開始は現状古墳時代後期末～終末期初頭と考えられるが、一括遺物として円筒埴輪片が確認されており、千葉市郷土博物館建設に伴う発掘調査でも円筒埴輪の底部片が確認されている。二例とも外面二次調整を欠くことから、古墳時代後期の遺物と考えられ、埴輪樹立段階の古墳が存在することを暗示している。また、周辺では小円墳がいくつか点在していたことが指摘されている（大谷 1993 ほか）。

これらの事実を踏まえたうえで、七天王塚の性格について迫ってみたい。まず、七天王塚であるが、現在盛土の遺存状態があまり良くないものもあり、明瞭に確認できるのは、1号塚・2号塚・5号塚である（図13）。また、5号塚は直近にまで調査区が及んでいるが、古墳の周溝は確認されておらず、土壙墓が1基確認されたのみであることから、周溝がすでに破壊されて

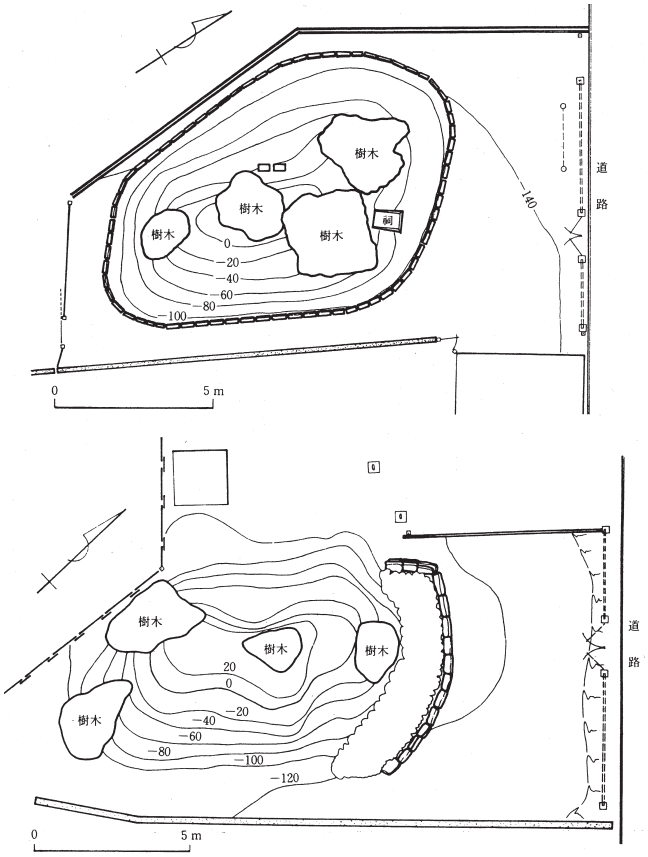


図13　1号塚（上）・2号塚（下）

しまっているのか、或いは5号塚は近世の塚である可能性もあろう。

そもそも、七天王塚＝堀内牛頭天王という図式は、近世以降であると指摘されており（大谷1993ほか）、また、千葉氏の崇敬する妙見信仰に基づいて北斗七星の形に配されたとされる説もあるが、それも猪鼻城＝千葉氏の城という図式の上で成り立つものであり、猪鼻城跡＝千葉氏の城（千葉城）が、発掘成果などによって否定されつつある（簗瀬2000）現状では、後世いずれかの段階で、七天王塚が整えられたことは間違いないと考える。

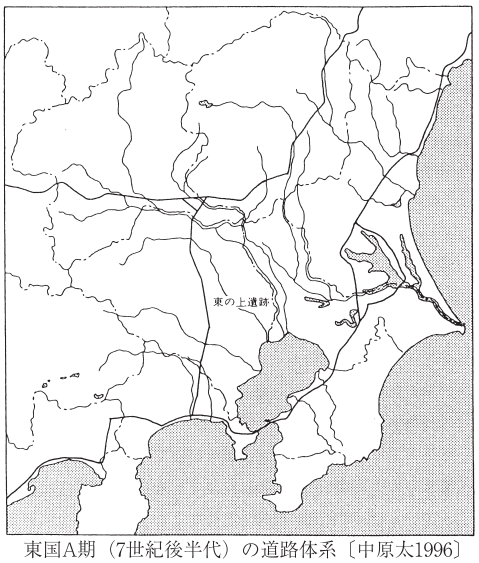
ただ、これらの塚群が後世いずれかの段階で整えられた可能性があり、土塁の残存を転用している可能性も充分にあるが、周辺で前方後円墳を含む古墳群が検出されたことにより、これらが元来は古墳であり、二次的に改変されて今日まで継承されている可能性は高いといえよう。また、宝永火山灰が遺構検出面直上から確認されていることから、近世以前の造作により大幅な地形の改編がなされていたことは、間違いないものと考えられる[11]。

まとめにかえて

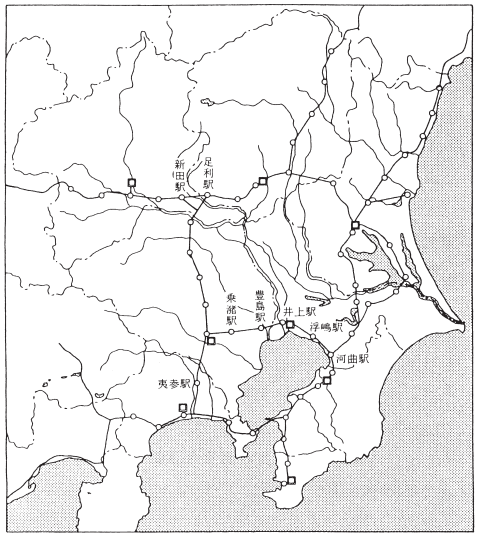
ここまで、猪鼻城跡で検出された墳墓・土壙墓について考察を重ねてきた。土壙墓については推測の部分も多く、遺跡の性格について充分に議論を尽くしたとは言い難い。今後の検討課題としておきたい。以下では、千葉国造について若干の考察を行い、まとめに変えたい。

猪鼻城跡内で確認された墳墓群・土壙墓群と千葉国造との関係性を考える上で鍵となるのは、常々指摘されていることであるが、都川流域には大型の古墳群が皆無であるという点である。国造の成立をどの段階に置くのかというのは、考古学的見解と古代史見解の間においては埋めがたい年代差が認められるものの、おおむね6世紀中葉～7世紀初頭という、古墳時代後期後葉～末葉の時期が与えられよう。

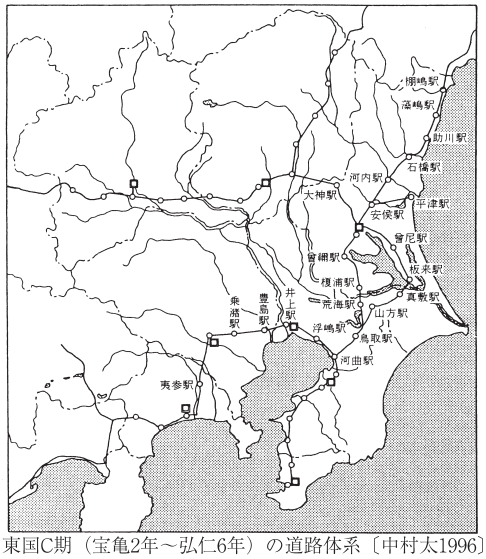
都川流域を見渡してみると、生実・椎名崎古墳群や菊間古墳群、姉崎古墳群などに匹敵するような巨大な古墳群は見いだせず、都川流域によって開折された周辺台地上に古墳数基が密集して展開している傾向が見て取れる。また、盟主墳と呼べる規模のものは少なく、都川流域の中で横穴式石室を持つ前方後円墳は、都町山王遺跡で検出された例



東国A期（7世紀後半代）の道路体系〔中原太1996〕



東国B期（7世紀末～宝亀2年）の道路体系〔中村太1996〕



東国C期（宝亀2年～弘仁6年）の道路体系〔中村太1996〕

図14　古代道の変遷

や猪鼻城跡の例のみで、規模も小規模である。

生実・椎名崎古墳群では規模が20m程度でも横穴式石室を伴う例が多数確認されており（白井2006）、人形塚古墳では箱式石棺と横穴式石室をともに埋葬施設に持つなど、その様相は一様ではない。

一方、都川流域の古墳群は、横穴式石室の築造数が少なく、箱式石棺などに筑波石を用いている例が多く見受けられ、都川から鹿島川を経由し印旛・手賀沼周辺の首長層との交流が伺われる。また、中原古墳群からは、どの古墳から出土したのか不明であるが、形象埴輪が出土しており、所謂「下総型埴輪」であるとされているが、これも首長間交流を裏付ける資料となろう。

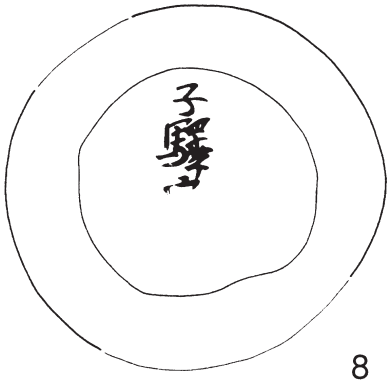


図15　観音塚遺跡出土土器

猪鼻城跡周辺では、古墳時代～古代にかけての遺跡が多数存在することは繰り返し述べてきた。ここでは、先に取り上げた千葉寺遺跡群のうち、観音塚遺跡出土資料を紹介する。観音塚遺跡290住居跡から出土した「子驛□」の文字を外面に持つ墨書土器は、千葉寺遺跡群、猪鼻城跡、荒久遺跡の性格を考える上で重要である（図14・図15）。この土器は、一部が欠損しており不明であるが、ウ冠をもつことが明らかとなっている。「子」は子の方角、北を意味し、「驛」は駅の旧字体である。これらのことから「北の方角に驛」があるという意味とも、「北の驛」ともとれる内容であるとされる。また、内容から、「□」は「家」である可能性が高いと考えられている。千葉市周辺では、河曲駅家が千葉市中央区新宿付近とされているが（千葉県史料研究財団2003）、既に新宿周辺は開発が進行しており、残念ながら遺跡の検出には至っていない。

また、千葉寺遺跡では千葉県下で類例の少ない和同開珎や帯金具などが出土しており（白井ほか2008）、周辺には８世紀代に比定される終末期方墳・土壙墓群が存在し、加えて、郡寺的役割を果たしたと考えられる千葉寺が所在することからみて、この一帯は古墳時代終末期～古代にかけて、千葉郡の中心的役割を担ったと考えられる。千葉寺遺跡群が郡衙或いはその関連施設とすれば、河曲駅もその周辺に比定されることは明らかである。河曲駅は、下総国府から上総国府との中継地点の１つであり、常陸の国府との分岐点でもある重要な駅家である。古くは海道であった東海道が、道の整備とともに陸路となり、千葉市周辺の首長層の重要性が高まった可能性は想像に難くない。都川流域の首長層も、このような背景で勢力を伸張したのではないかと考えられる。

あくまで仮説にすぎないが、これらを鑑みれば、「千葉国造」は古代道における陸路の成立と相前後するような形で勢力を伸張した首長層なのではないであろうか。古墳時代後期においては村田川流域・養老川流域の首長層（上総北部）が優勢であったが、次第に陸路の開拓が進み、それに伴って都川流域の首長層は力を伸張したと考えれば、古墳時代前期・中期を通して古墳が少なく、また、後期～終末期初頭においても大型の前方後円墳・円墳・方墳が築造されなかったのも理解できよう。

謝辞

本稿は、千葉大学大学院の修士論文として提出したものを、大幅に改変し、修正を加えたものである。作成に当たっては、岡本東三・柳澤清一両先生に御指導・御鞭撻を賜った。また、猪鼻城跡の発掘調査の際には、千葉市郷土博物館の簗瀬裕一氏、菊池健一氏（当時）にご助言をいただき、金言を賜った。資料実見に際しては、千葉市埋蔵文化財センターの飛田正美氏、長原亘氏をはじめ、千葉市埋蔵文化財センター職員の方々に御協力を賜った。

参考文献や資料に関しては、越生町教育委員会の近江哲氏・千葉大学大学院博士課程の長山明弘氏に御教示いただいた。また、岩城克洋・鈴木慎也・中村剛・白土玄諸氏をはじめ多くの方々に励ましを頂戴し、図版作成や校正に当たっては、千葉大学考古学研究室生の諸兄に御協力･御助力を賜った。特に、小林嵩・佃竜太・松島沙奈・花澤龍太郎・村上浩代・池田隼大・沢辺大輔・下田光・田中瞳・成田亮子諸氏にはお手を煩わせ、多大な御迷惑かけた。記して感謝の意を示す。

註

1）古墳の定義は人によって曖昧である。所謂古墳出現期（纒向型前方後円墳 / 前方後円墳型墳丘墓）の問題や、本論で取り上げる古墳時代終末期〜古代における、方墳と方形区画墓の区分などが挙げられる。

2）房総の玉作遺跡、滑石工房跡は成田から始まり、その初現は古墳時代前期まで遡る。

3）古墳時代前期・中期の遺構はごく僅かで有り、墳墓もほとんど確認されていない。滑石工房跡からは未製品の勾玉の他に、完形品に近い勾玉、臼玉などが検出されており、在地首長層へ供給されていた可能性が窺える。

4）都川以北、利根川以南、印波水系以西、江戸川以東を、ここでは千葉北西部とする。

5）本論では「下総型埴輪」および「山武型埴輪」と呼称するが、その定義はやや曖昧である。

6）埴輪祭祀の終焉と前方後円墳の終焉には、実際には時期差が存在すると考えられる。順序としては、埴輪祭祀の終了が先で、前方後円墳の消滅が後と考えられる。ただ、古墳時代後期と終末期を区分する上で容易に判断できる指標の一つであると考え、ここでは、後期と終末期を分ける区分の一つとした。

7）房総半島において、「大型前方後円墳」或いはそれに準じるような規模の古墳築造は後期中葉以降に最盛期を迎える。そして、埴輪祭祀の終焉と相前後するような形で前方後円墳の築造は終わり、方墳原理の採用へ向かう。

方墳原理の採用を、駄ノ塚古墳の須恵器年代（TK209 型式中段階）に照らし、ここを上限とする事には異論がない。勿論、須恵器年代＝副葬年代とするのには抵抗があるため、実際の上限はそれよりも遅れると考えるほうが妥当であろう。その一方、「房総最後の前方後円墳」と呼称されることもある竜角寺浅間山古墳の築造年代は、主たる報告者である白井が「副葬品の年代観については、〈中略〉7 世紀第 1 四半期〜第 2 四半期に位置づけられる」としており、白石もその年代観に肯定的で、古墳築造年代を 7 世紀第 1 四半期としている（白井ほか 2002）。これは、駄ノ塚古墳の推定される築造年代にかなり近い年代間である。

これは、千葉県文化財センターによる報文と〔千葉県都市公社 1973、1977〕、武田宗久による整理〔千葉市誌編纂委員会編 1974〕による呼称が混乱しているためである。以下では、原則的に報告書に記載されている古墳名称を記載することとする。

8）東海西部の須恵器の型式学的基礎を築いたのは、後藤健一であった。後藤の構築した編年は今日でも関東において須恵器の型式を決める基準となっている。その一方、後藤の編年の問題点が指摘されるようになり、東海産須恵器の体系的見直しがなされつつある。猪鼻城跡の遺物の年代決定の示標として、鈴木の型式学的編年を基軸に据えることとする（鈴木 2001）。

9）口縁部から頸部にかけての特徴はフラスコ瓶に類似している。フラスコ瓶とすると、その出現は TK217 型式期からとなるが、胴部破片内部に自然釉が付着しており、その流れ方からみて平瓶と判断した。

10）古墳のように高塚であるのか、低墳丘、或いは墳丘をほとんど持たない可能性もあるが、ここでは墳墓として一括して記載する。

11）台地の東側端部に猪鼻 3 号墳が検出されているが、全体の半分程度が依存しているのみであり、さらに崖側に延びていく様子が確認されている。崖下には野球場などが存在しており、それ以前の土地利用は不明であるが、かなり古い段階で削平が行われていた可能性もあるが、旧地形は現在の形状と大きく異なるものと考えられる。

引用・参考文献

甘粕　健・久保哲三 1966「関東」『古墳時代』上　日本の考古学Ⅳ　河出書房

安藤鴻基 1976「埴輪祭祀の終焉」『古代』第 59・60 号　早稲田大学考古学会

安藤鴻基 1992「終末期方墳」『国立歴史民俗博物館研究報告第 44 集　東国における古墳の終末』国立歴史民俗博物館

石出猛史 2003「ゐのはな昔がたり」『千葉医学』79

石出猛史 2004「続ゐのはな昔がたり」『千葉医学』80

大川原竜一 2009「国造制の成立とその歴史的背景」『駿台史学』第 137 号

大阪府立近つ飛鳥博物館編 2006『年代のものさし－陶邑の須恵器－』大阪府立近つ飛鳥博物館

大谷克己 1988『千葉の牛頭天王（改訂版）』大谷克己教授退官記念会

大谷克己 1993「葛城の牛頭天王祠」『千葉文華』第 28 号　千葉県文化財保護協会

岡本東三 1996『東国の古代寺院と瓦』吉川弘文館

岡安光彦 1984「いわゆる「素環の轡」について－環状鏡板付轡の型式学的分析と編年－」『日本古代文化研究』創刊号　PHALANX －古墳文化研究会－
岡安光彦 1985a「6 ～ 7 世紀の馬具」『考古学ジャーナル』No.257　ニューサイエンス社
岡安光彦 1985b「環状鏡板付轡の規格と多変量解析」『日本古代文化研究』第 2 号　PHALANX －古墳文化研究会－
岡安光彦 1986a「馬具副葬古墳と東国舎人」『考古学雑誌』日本考古学会
岡安光彦 1986b「終末期の前方後円墳と馬具」『日本古代文化研究』第 3 号　PHALANX －古墳文化研究会－
小沢　洋 2008『房総古墳文化の研究』六一書房
加藤大揮・小林　嵩・佃　竜太・松嶋沙奈 2011『猪鼻城跡』千葉大学文学部考古学研究室
金丸　誠 1982「房総半島における方形・円形周溝について」『(財) 千葉県文化財センター』第 1 号
岸本直文 2011「横穴式石室の型式は被葬者の活躍期を示す」『考古学研究』58 巻第 1 号　考古学研究会
木對和紀 1987「房総における改葬系区画墓の出現期」『市原市文化財センター研究紀要Ⅰ』 財団法人市原市文化財センター
木對和紀 1997「房総における改葬系区画墓の出現期Ⅱ」『生産の考古学』
倉田義広 1999『千葉市猪鼻城跡』(財) 千葉市文化財調査協会
車崎正彦 1987「房総豪族層の動向」『古代』第 83 号　早稲田大学考古学会
黒沢　崇 2007「千葉県における古墳時代終末期以降の方形墳墓の展開－方墳と方形区画墓との差異について－」『日中交流の考古学』同成社
國分篤志 2007『猪鼻城跡』 千葉大学考古学研究室
坂本美夫 1985『馬具』考古学ライブラリー 34
佐倉市史編纂委員会編 1973『佐倉市史』巻 2　佐倉市史編纂委員会
篠川　賢 1985『国造制の成立と展開』古代史研究選書　吉川弘文館
篠川　賢 1992「「国造本紀」の国造系譜」『国立歴史民俗博物館研究報告第 44 集　東国における古墳の終末』国立歴史民俗博物館
篠川　賢 2001『日本古代の王権と王統』 吉川弘文館
島立　桂・西野雅人・大谷弘幸・白井久美子・松井　章・井上哲郎 2006『千葉市中野台遺跡・荒久遺跡 (4) －独立行政法人都市再生機構千葉寺地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ－』千葉県教育振興財団調査報告第 527 集　独立行政法人都市再生機構・(財) 千葉県教育振興財団
白井久美子 2002『古墳から見た列島東縁世界の形成　－総武・常陸の内海をめぐる古墳文化の相剋－』(有) 平電子印刷所
白井久美子 2007「関東の後・終末期古墳群の特性」『関東の後期古墳群』六一書房
白井久美子 2009「前方後円墳から方墳へ」『房総と古代王権』高志書院
白井久美子・倉内郁子・島立　桂・西野雅人・四柳　隆・田中　裕 2002『千葉市鷲谷津遺跡』 千葉県文化財センター調査報告第 422 集　都市基盤整備公団千葉地域支社・(財) 千葉県文化財センター
白井久美子・島立　桂・西野雅人・四柳　隆・大澤正巳・鈴木瑞穂 2004『千葉市観音塚遺跡・地蔵山遺跡 (3) －都市基盤整備公団千葉寺地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－』千葉県文化財センター報告第 472 集 (財) 千葉県文化財センター
白井久美子・関口達彦・鈴木弘幸・鶴岡健 2006『千葉東南部ニュータウン 35 －千葉市椎名崎古墳群Ｂ支群－』千葉県教育振興財団調査報告第 544 集　独立行政法人都市再生機構・(財) 千葉県教育振興財団
白石太一郎 1982「畿内における古墳の終末」『国立歴史民俗博物館研究報告』第一集
白石太一郎編 2005『古代を考える　終末期古墳と古代国家』吉川弘文館
白石太一郎・杉山晋作・設楽博己・大久保奈奈 1996「千葉県成東町駄ノ塚古墳発掘調査報告」『国立歴史民俗博物館研究報告第 65 集　東国における古墳の終末 (附編)』国立歴史民俗博物館
鈴木敏則 2001「湖西窯古墳時代須恵器編年の再構築」『須恵器生産かの出現から消滅　第 5 分冊　補遺・論考編』東海土器研究会
杉山晋作 2000「千葉における前方後円墳の終焉とその後」『第 5 回東北・関東前方後円墳研究会大会《シンポジウム》前方後円墳の終焉とその後　発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会
田中清美 2005「方形区画墓等にみる時代 (地域) 様相」『駒澤考古第 30 号』　駒澤大学考古学研究室
田中英世 2007『千葉市鎌取場台遺跡』(財) 千葉県教育振興財団埋蔵文化財調査センター
田中英世 2007『千葉市高台向遺跡・猪鼻城跡』(財) 千葉県教育振興財団埋蔵文化財調査センター
(財) 千葉県文化財センター編 1989『千葉市荒久遺跡 (1) －千葉県立中央博物館野外観察地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』千葉県文化財センター調査報告第 153 集　千葉県教育委員会
(財) 千葉県文化財センター編 1989『千葉市荒久遺跡 (2) －県立青葉の森公園建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』千葉県文化財センター調査報告第 154 集　千葉県都市部

（財）千葉県文化財センター編 1991『佐倉市栗野Ⅰ・Ⅱ遺跡』千葉県土地開発公社
千葉市誌編纂委員会編 1974『千葉市史　原始古代中世編　第一巻』千葉市
千葉市誌編纂委員会編 1976『千葉市史　原始古代中世　史料編 1』千葉市
千葉市誌編纂委員会編 1993『絵にみる図でよむ千葉市図誌』上・下巻　千葉市
（財）千葉市文化財調査協会編 1994『（財）千葉市文化財調査協会年報 6 －平成 4 年度－』（財）千葉市文化財調査協会
（財）千葉市文化財調査協会編 1995『（財）千葉市文化財調査協会年報 7 －平成 5 年度－』（財）千葉市文化財調査協会
千葉大学薬友会編 2003『薬友会報』千葉大学薬友会
（財）千葉県史料研究財団編 2001『千葉県の歴史　通史編　古代 2』
（財）千葉県史料研究財団編 2003『千葉県の歴史　資料編　考古 2　弥生・古墳時代』
（財）千葉県史料研究財団編 2004『千葉県の歴史　資料編　考古 4　遺跡・遺構・遺物』
（財）千葉県史料研究財団編 2007『千葉県の歴史　通史編　原始・古代 1』
千葉日報社 1981『千葉市風土記』
長原　亘 2009「千葉氏の古墳時代概観　～古墳の分布傾向から～」『千葉いまむかし』第 22 号　千葉市教育委員会（千葉市立郷土博物館市史編纂担当）
前川明久 1963「蘇我氏の東国経営について」『続日本紀研究』第 10 巻 6・7 合併号　続日本紀研究会
松尾昌彦 2005「馬具研究と「分布論」－馬具副葬古墳の持つ意味－」『古代武器研究会・鉄器文化研究会連合研究集会　馬具研究のまなざし－研究史と方法論－』古代武器研究会・鉄器文化研究会連合研究集会実行委員会
簗瀬裕一 1998「千葉城跡概観－千葉氏居城の基礎的考察」『千葉いまむかし』第 11 号　千葉市教育委員会
簗瀬裕一 2000「中世の千葉－千葉堀内の景観について－」『千葉いまむかし』第 13 号　千葉市教育委員会
簗瀬裕一 2003『猪鼻城跡・皿池東遺跡』（財）千葉市教育振興財団埋蔵文化財調査センター
渡辺修一 1983「「群小区画墓」の終焉期－所謂「方形周溝遺構」をどう見るか」『研究連絡誌』6　（財）千葉県教育振興財団文化財センター
渡辺修一 1985「「群小区画墓」の終焉期（2）－「方形周溝遺構」における埋葬施設の新例とその検討－」『研究連絡誌』14　（財）千葉県教育振興財団文化財センター
渡辺修一 1995「〔群小区画墓〕の終焉期（3）」『千葉県文化財センター研究紀要－ 20 周年記念論集－』（財）千葉県文化財センター
渡辺修一・福田　誠 1991『千葉市荒久遺跡（3）－県立青葉の森公園建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』千葉県文化財センター調査報告書　第 193 集千葉県都市部・（財）千葉県文化財センター

図版出典

図 1：左…大阪府立近つ飛鳥博物館編 2006　右上…岸本 2011　右下…鈴木 2001　をそれぞれ一部改変
図 2：（財）千葉県史料研究財団編 2001　を一部改編
図 3：千葉市誌編纂委員会編 1976　を一部改編
図 4：加藤ほか 2011
図 5：千葉市誌編纂委員会編 1976　を一部改編
図 6：長原 2009　を一部改編
図 7 ～図 9：加藤ほか 2011　を一部改変
図 10：渡辺ほか 1991
図 11・図 12：（財）千葉県文化財センター編 1991　を一部改編
図 13：大谷 1988
図 14：中村太一 1996　を一部改編
図 15：白井ほか 2004